

国際共同研究交通費補助 研究成果報告書

(適宜行追加可)

所属・職・氏名	経営戦略研究科・教授・石原俊彦
共同研究者 所属・職・氏名	英国キール大学名誉教授 前 エストニア・タリン工科大学教授 Istemi Demirag
研究課題	PPPの意義に関する歴史的変遷の分析的研究
共同研究 実施期間	派遣期間： 年 月 日 ~ 年 月 日 招聘期間： 2024年 11月 19日 ~ 2024年 11月 25日
共同研究 実施場所	関西学院大学上ヶ原キャンパス・梅田キャンパス 和歌山大学

1. 研究の成果（本共同研究によって得られた新たな知見、成果等を簡潔に記述してください。該当しない場合は「該当なし」と記載してください。）	
（1）学術的価値（本研究により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果）	
PPP（Public Private Partnership）とその前進であるPFI（Private Finance Initiative）はインフラ資産や公共施設の老朽化対策としてわが国でも20世紀の末から注目されている手法である。	
現在わが国でもおよそ1000件以上のPFI/PPP案件がすでに実施されている。その中には成功事例だけでなく失敗と目される事例も少なくない。	
今回の共同研究はごく短期間のものであったが、PFI/PPPの成功と失敗の分析には、従前からのVFM（Value For Money）の視点だけではなく、価値共創の視点にも踏み込んだ分析は必要であることが確認された。	
インフラ資産や公共施設が提供する公共サービスの生み出す価値は、ロジックモデルで評価を行うだけではなく、パブリック・サービス・ロジック（Public Service Logic: PSL）を援用した統合モデルで認識・測定することの有用性が、今回の共同研究においては明らかになった。	
（2）相手国との交流（海外の研究者と学術交流することによって得られた効果）	
Istemi Demirag 教授は、欧州を代表するPFIとPPPの研究者であり、この領域で頻繁に引用される数多くの学術論文を公表されている。	
PFI/PPPの研究では、PFIの発祥国である英国の研究者が執筆する研究論文が重要な先行研究と目されてきたが、Demirag 教授の研究は、英国外部から英国の取り組みを客観的に考察されたもので、PFI/PPPの歴史的な変遷を中立的な視点で分析する貴重な機会となった。	
Demirag 教授の母国であるトルコでは、国際協力で多額の資金が国外からトルコ政府に供与されている。トルコ政府はこの資金をもとにしてPFI/PPPを展開している。この図式は行政と事業者という2つの主体の存在を前提に一般的に思考されてきたPFI/PPPに、外国の政府という第三の主体を組み込むものであり、Demirag 教授から提供された知見は、PFI/PPPの国際的な価値創造という歴史的にも新たな視点を見出すきっかけにもなった。	
（3）社会貢献（社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献）	
現在わが国でもその影響が顕著になってきた公共インフラと公共施設の陳腐化、ならびに、それらを更新するための財源不足の問題は、日本経済を揺るがす非常に大きな問題となってきた。特に、水道インフラや道路インフラの老朽化が、日本国内の市民生活及ぼす悪影響の程度は計り知れないものになっている。	
PFI/PPPに関わる今回の研究は、老朽化対策や財源確保などの難局において政府や地方自治体に課題を解決する嚆矢を提供するものと位置づけられる。	
社会生活の質の改善には、本国際研究が取り組んだインフラ等のPFI/PPPの知見は必須である。	
また、社会が高齢化されて技術の伝承が困難な時代となり、行政がこれまでのように有能な技術者を一定数確保することは極めて困難状況である。PFI/PPPでインフラ等の更新が実現できなければ、日	

本国内の国民生活の質は悪化の一途をたどることになる。本共同研究はそうした事態を回避するための基礎的な理論研究として位置づけられるものである。

(4) 若手研究者養成への貢献 (若手研究者養成への取り組み、成果)

今回の国際共同研究には、大学院経営戦略研究科博士課程後期課程3回生の参画を得て、Demirag 教授の先行文献の渉猟やその分析、さらには、未解決な様々な課題の抽出を行った。

この博士課程後期課程3回生はおよそ2年以内に博士学位申請論文を提出予定であり、今回の国際共同研究に参画したことで、博士学位論文で求められる先行研究の渉猟を相当に進められたと考えられる。

また、Demirag 教授の滞在中には、関西学院大学でゼミナール形式の研究会を開催した。そこには、弊研究室に所属する大学院研究員、そして、OBOGである大学教員が合計で約15名参加した。

博士課程後期課程生や大学院研究員、さらには、弊研究室OBOGの若手中堅大学教員には、今回のような国際交流の機会は貴重な研鑽の場となり、彼ら/彼女らが研究の視野を海外に大きく広げる一つのきっかけにもなったと考えられる。

このほか、Demirag 博士には日本での滞在中にこうした若手研究者との研究以外の交流にも積極的に関与していただき、姫路や奈良などの観光を楽しんでいただいた。若手研究者にとっては、こうしたアテンドは特に貴重な経験である。国際的な研究センスを持つ若手研究者の養成は、語学力や留学でのみ形成されるものではなく、地道な日本滞在中のアテンドでシニアの海外からの研究者への接遇を経験することで、得られるところが大きい。その意味でも今回の招聘は若手研究者の養成という視点でも非常に大きな貢献であると認識できる。

(5) 将来発展可能性 (本研究を実施したことにより、今後どの様な発展の可能性が認められるか)

今回の国際共同研究はごく短期間のもので、今すぐに研究成果を上梓できるものではない。しかしながら、我が国の経済情勢に基づいてPFI/PPPの有用性を、価値共創の視点で認識・測定する実証研究の展開が今後可能である。

そして、それらの研究成果は、Matsumoto, M., Istemi Demirag and Toshihiko Ishihara 三名の共著論文としてたとえば『Eurasian Journal of Business and Management』のような英文査読ジャーナルに投稿することを目的とすることができる。

さらには、若手研究者の育成とも関連する部分では、博士課程後期課程生や大学院研究員が、博士論文の完成に向けて、非常に大きな知的な刺激を得たことで、それら各人の研究に将来的に多くの発展可能性が実現されたと思われる。

(6) その他 (上記(1)～(5)以外に得られた成果があれば記述してください。)

例：大学間協定の締結、他事業への展開、受賞、産業財産権の出願・取得等

Demirag 博士はトルコの Bahcesehir University 国際関係学部の教授に近日中に着任予定である。その関係で、学部レベルでの関西学院大学との国際連携について熱心な勧誘をいただいた。

ただ、私の所属は大学院のみの研究科であり、教授にはそのことを丁寧に説明してお断りをしたところである。なお、大学のほうで Bahcesehir University との大学間協定の締結を希望される場合には、その橋渡しを行うことは容易である。

2. 研究発表 (本共同研究の一環として発表 (予定含む) したものについて記述してください。なお、印刷物がある場合は1部添付してください。)

例：共著論文、口頭発表、出版、ポスター発表

現時点では、上記に相当する研究成果等はアウトプットされていません。